

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C)（特設分野研究）

研究期間：2019～2022

課題番号：19KT0026

研究課題名（和文）自己語りとオーラル・コミュニティ形成の経験的研究 交話機能と地域の歴史の再構築

研究課題名（英文）An Empirical Study of Self-narrative and Oral Community Formation: Phatic Function and Reconstructing Local History

研究代表者

小林 多寿子 (KOBAYASHI, Tazuko)

一橋大学・ 名誉教授

研究者番号：50198793

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、自己語りの実践とコミュニティ形成を事例調査し、オーラル・コミュニケーションが人と人との繋がりを生成する交話機能やオーラルヒストリーの共有による地域の歴史の構築と世代継承性の実際について、大震災・原発事故後に過疎化の進む地域の実態を通して明らかにした。本研究は、1参与型フィールドワークとライフストーリー・インタビュー、2ドキュメントの収集と分析、3エスノグラフィ的記述手法という三つの質的アプローチにより、オーラル・コミュニケーションによる交話機能を生かした地域コミュニティの再生、自己語りの実践やオーラル・コミュニケーションが地域の歴史再構築へのリソースとなることを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、自己語りが歴史性を含み、集合的な共有で歴史化への契機となること、オラリティのもつ交話機能がコミュニティ再生へ果たす役割を具体的に描き出した点において社会学的意義がある。地域コミュニティにおけるオラリティの有効性の解明はオーラルヒストリーの社会学的研究にとって新たな成果となった。東日本大震災・原発事故後の地域荒廃という厳しい困難を抱える地域におけるオーラル・コミュニケーションを通して人びとの繋がりを回復しコミュニティ再形成をめざす活動は、現代日本の地方社会に共通する過疎化や高齢化、災害による困難等のなかで地域に生きる人たちにも共有される問題の探究として汎用性のある社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：In this research, the practice of self-narrative and community formation is investigated, and the phatic function of oral communication that creates connections between people, and the construction of local history and generativity through the sharing of oral histories are examined and clarified through the actual situation in the area where depopulation is progressing after the great earthquake and nuclear accident.

The three qualitative approaches were used in this study: (1) participatory fieldwork and life story interviews, (2) document collection and analysis, and (3) ethnographic description method. As a result, this research enabled the capture of the regeneration of local communities which practiced effective utilization of the interaction function of oral communication. I further clarified that the practice of self-narrative and oral communication can be a resource for reconstructing local history.

研究分野：経験社会学

キーワード：自己語り オーラル・コミュニティ 交話機能 共生性 世代継承性 オーラル・コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的背景には、(1) 戦後日本社会における自己語りと文章運動の系譜、(2) ライフストーリー研究をはじめとする質的調査研究の深化、(3) 2000年代以降のオーラルヒストリー研究の展開という研究代表者が関わってきた三つの学術動向がある。

(1) 戦後日本社会において、1950年代の伝記を書く運動や生活記録運動、1960年代末の「ふだん記」運動、1980年代後半から隆盛した自分史ブームを研究する過程で、生活記録、自分史、ふだん記、人生史等々多様な言葉で称された個人的経験を書きあわす社会現象を社会学的に明らかにしてきた。自己を表現する行為を「自己語り」と総称し、自己語り現象の系譜を辿りつつその書かれ方をとらえてきたが、そこで一貫して見いだされたのは自己語りをめぐる「共に書く」という共同体的書き方である。自己の経験を書くという個人的行為を他者との共同的行為へ転換する際に見いだされる局面を社会学的に研究し、とくに1990年代後半以降、高齢化社会の進展でサークル的な共同体的書き方や自費出版の動きが明らかにされた。

(2) 社会学におけるライフストーリー論は、1980年代後半より現象学的社会学や構築主義、ナラティブ論の隆盛に牽引されて認識論的に深化し、ライフストーリー法は社会調査法としても応用が進んできた。本研究テーマである自己語りとは自己のあらわすライフストーリーであり、ライフストーリー論の進展が本研究の視角の基盤となった。

(3) 2000年代に進展したオーラルヒストリー研究も本課題の学術的背景にある。口述史研究にとどまらない領域横断的研究アリーナにおいて、とくに声とオラリティの社会学研究では、W・オングの指摘した「音のエコノミー」という聴覚がもつ「一つにする a putting together」という音の統合志向を重視し、統合化中心化する聴覚の作用に着目した。このような聴覚の特性をふまえたうえで、声を聴くことが累積的傾向をもち、状況依存的な思考をもとに人間をホリスティックにとらえる志向をもつというオラリティの特性を明らかにした。本研究では、この特性をふまえてオーラル・コミュニケーションを検討した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第一に、自己語りの実践をとおして形成されるオーラル・コミュニティの実際を明らかにし、とくに自己を語る際のオーラル・コミュニケーションが生成する交話機能とオーラルヒストリーを共有することによる世代継承性について解明することにある。第二に、現代日本の地方社会において高齢化や災害による困難に直面するなかで自己の経験を語る行為とその実践の場を調査し、自己語り新たなオーラル・コミュニティ形成に資すること、そしてオラリティの意義をもとにした自己語りの実践の、より持続的な可能性を探求することも研究目的である。

本研究の目的に達するための学術的問題意識は、一つには自己語り豊かななされるオーラル・コミュニティにおいて交話機能や世代継承性の実態を問うことにある。自己語りの共同実践がいかに関域の歴史の再構築への足掛かりとなるのかという問いでもある。二つには、とくに人口減少や災害による大きなダメージを抱えた地域において、自己語りを核とするオーラル・コミュニティがいかに関域形成され、どのような役割を果たしているのかを問うている。三つには、自己語りがけっして孤独な個人的行為ではなく他者とつながりを拓く機能をもつ状況を、語り合いの場の創出や聞き書き活動というオラリティを核とする地域活動の事例をとおしてみるのではないかと問うている。

自己語りのために声の共有される範囲で形成されるオーラル・コミュニティが人びとを情緒的につなぐ交話機能を果たしていること、さらにオーラルな語りを集成しリテラルな作品とすることで「近い過去の歴史」を構築する機能というオラリティとリテラシーの往還の実際とその意義を明らかにするというねらいが研究課題の中核になっている。

3. 研究の方法

本研究の目的である、自己語りの実践をとおして形成されるオーラル・コミュニティの実際をとらえること、自己を語る際のオーラル・コミュニケーションが包含する交話機能の作用とオーラルヒストリーを共有することによる世代継承性について解明することに対して、つぎの三つの方法で研究に取り組んだ。

- (1) 参与型のフィールドワークとライフストーリー・インタビューを主軸とする質的調査
- (2) 自分史や聞き書き集等のリテラルなドキュメントの収集と分析
- (3) 参与型関与によるエスノグラフィ的記述という手法による対象の理解と分厚い記述

以上の方法で、現地に赴いてコミュニティへの参与観察とコミュニティを形成するメンバーたちへインタビュー調査をおこなった。フィールドワークでは、集合的なコミュニティの場でのオーラル・コミュニケーションを注視すること、いま一つは個人的経験をインタビューによってオーラルに表出してもらうこと、この二点に着眼しながら、現地でのフィールドワークやドキュメント収集にあたり、そこから対象への深い理解と分厚い記述をめざした。

本研究は、研究計画の段階では、具体的な事例として福島県南相馬市と福岡県八女市という二つの地方社会における実態へアプローチすることを立案した。

福島県南相馬市は、東日本大震災と福島第一原発事故による災禍で原発から 20 キロ 30 キロ圏内の避難指示区域では住民の離散と 5 年の地域の空白という困難を強いられた地区を広く含む。2016 年 7 月の避難指示解除後の現在、帰還した住民たちは地域復興への途上にあって複数の NPO 団体がオーラル・コミュニケーションを重視した地域活動に取り組んでおり、地域社会の再生方途に自己語りの実践が見いだされていた。

福岡県八女市では 20 年以上にわたり民間の自分史グループが書くことを主にした自己語り実践のサークル活動を継続しており、長期にわたる自己語りの蓄積が新たなコミュニティ形成を促してきた。この地域は、高齢化や人口減少という社会変動だけでなく、数年前には集中豪雨による河川氾濫という自然災害による困難を経たが、長年の自己語りの実践と定期的に集うことで形成されるオーラル・コミュニティが人びとをつなぐ機能をはたしていることが注目された。

しかしながら、本課題研究の期間中、コロナ禍が丸 3 年続き、断続的に緊急事態宣言が発せられた。その時期には、遠隔地へ出かけるフィールドワークや、高齢化の進む調査対象地および高齢者で構成されるグループの対面インタビュー調査の実施は難しかった。そこで、当初の調査計画を修正し、フィールドワークは福島県での事例に絞ることにした。さらに研究期間を 1 年延長して、コロナ禍の状況を注視しつつ、現地での調査活動は、可能な範囲で調査協力者と調査者双方の安全と安心に配慮した実施を心掛けた。

4. 研究成果

本研究は、コロナ禍を被りながらも、研究課題にもとづいた 3 つの方法で研究活動に取り組み、研究目的に沿って二つの主要な点を主軸に調査をおこない、研究成果を得ている。

(1) オーラル・コミュニティ形成

成果の第一点は、自己語りとオーラル・コミュニティの実際をとらえたことにある。参与型のフィールドワークとインタビュー調査をとおしてオーラル・コミュニケーションのありかたとコミュニティの形成の現状がみえてきた。南相馬市小高区で複数のコミュニティ活動のインタビューと参与観察を中心とするフィールドワークを実施した。とくに着目したのが ① 唐辛子コミュニティと ② 大富サロンである。

① 唐辛子コミュニティ

唐辛子コミュニティとは、小高工房が手掛ける「小高とうらがしプロジェクト」によって築かれた唐辛

子でつながる人びとのコミュニティを指している。

小高区は、東日本大震災直後の原発事故によって警戒区域となり、2016年7月の避難指示解除まで居住者のいない町となったが、この5年の住民不在期間に動物の闊歩する地域となった。除染が終わり、暮らせる町になっても獣害による農作物への影響は深刻であった。猿や猪、ハクビシンなどの動物が田畑を荒らし、作物を食い荒らす。だが、唐辛子は、動物の食べない、獣害を免れる作物として見いだされた。

「小高とうがらしプロジェクト」は、唐辛子栽培者に株券と苗を渡し、収穫された唐辛子をすべて買い取るというシステムを編みだした。工房では一味や辣油のような唐辛子製品を作り、販売する。ここに、唐辛子に媒介された栽培者-工房-購入者が円環的につながる唐辛子コミュニティが形成されている。

このプロジェクトで唐辛子を栽培する人たちは、植物を育成することで土地の荒廃を乗り越えていった。市場で小高の産物として販売されることにも新たな喜びを見だし、つながりの連鎖に生きがいを感じ始めている。このような唐辛子を媒介とした循環が成立したところに唐辛子コミュニティは築かれている。

このコミュニティの核となっている小高工房の前身が小高プラットフォームである。小高プラットフォームは、帰還開始後まもなく地元出身者が中心となって立ち上げた交流の場であった。人のいなくなった小高でわずかの住民しかいなかった帰還当初、町に灯がほしい、立ち寄れる場がほしいと駅前通りにフリースペースを開設した。その場は、人と人が会話をするオーラル・コミュニケーションをとるための場であった。生活再建が進むにつれ、小高プラットフォームは、唐辛子を主軸とする「小高とうがらしプロジェクト」に取り組む小高工房へと転換していった。唐辛子コミュニティは、このオーラル・コミュニケーション醸成の場があったからこそ築かれたことがインタビュー調査から明らかになった。オーラル・コミュニケーションに根ざしている点において、唐辛子コミュニティはオーラル・コミュニティ形成の一つの事例としてさらに考察を深めたい。

② 大富サロン

大富は、南相馬市小高区の西部、山里の集落である。津波の被害はなかったものの、20キロ圏内に位置するため、全住民が避難を強いられ、5年間、居住者がいなくなった。発災から5年4か月後、2016年7月に、避難指示解除準備区域が解除され生活圏内(家屋と周辺田畑)の除染が完了し、やっと帰還できるようになった。しかし、5年の空白は大きく、避難先で新しい生活を築き、帰還を断念した人も少なくない。2023年現在、帰還して生活を再建した世帯は18世帯、震災直前の68世帯の約4分の1である。

そのような大富地区において、帰還開始の4か月後、2016年11月から大富サロンは始まった。月2回、第2第4土曜日午前に地元の公民館である集落センターにあつまっておしゃべりする場が設けられている。大富サロンは、「大富サロンかけの森」とも称され、「趣旨はみなさん集まって、お話やゲーム等をして楽しむ憩いの場」である。サロンの様子をエスノグラフィックに記述してみる。

*2022年8月第4土曜日

午前10時、軽自動車や軽トラックなど車を運転して集落センターに集まってきた。男性9名、女性4名。まずビデオをみながらテレビ体操をおこない、その後は輪になっておしゃべりをした。外部から参加した人は、役場の若い男性職員と夏休みを利用して小高を体験している京都からきた大学生、私たちの研究グループ3名の計5名である。自己紹介をし、その後は、問いを投げかけて応答が出たり、隣り合わせた席の人とおしゃべりをしたりした。

おしゃべりがはずむなかで、私たちは一人の住民に尋ねられた。

「大富の人口が戻らず高齢者ばかりになり、今後のことが案じられるが、大富にはとくに目玉になるような魅力もなく、どうしたらいいか、なにかいい知恵はないか」と。

日本の地方社会で同様の問題に直面している地域が多くあることをふまえると、簡単に解決策が出せる問題ではないだろう。しかし、大富には大富ならではの特徴があり、その特徴を生かすことはできないものかと考えている。そこで、付け加えた、

「高齢化と人口減少の進む中で、ただちに戻ってくる人を増やすこと、あるいは若い世代の人口を増やすことは簡単なことではない。だが、居住人口は少ないかもしれないけれども、子や孫、親戚など地区の外に住む人たち、そして私たちのような地区外のよそものを受け入れて、地区の外に住む人もこの地区をサポートしてくれる人として非居住者も巻き込んで広がることで、居住者にとどまらない人をふくめた

地区のありかたになっていくのではないかと。私たちを受け入れてくれることがこの地区の可能性を示していることになるとおもう」と述べた。

大富サロンはオーラル・コミュニケーションの場であり、そこに本研究課題にもとづくフィールドワークを受け入れてくれたこと自体にこの地区のもつオープン性とストレンジャーを受け入れる寛容性、コミュニケーション力の高さと交感機能の重視の特徴があらわれていると考えている。

*サロン・コミュニティ形成とその機能

この定期的な集合の場は、帰還した住民にとって直接顔を合せる貴重な機会となっている。大富は、山里に集落が点在する地理的環境と車が移動手段となっているため、対面してオーラル・コミュニケーションのできる場は希少である。このサロンの場こそ住民同士が直接に対面できる空間である。ここにサロン・コミュニティの形でかつての地域コミュニティが再生されつつある現状をみることができる。

2011年4月、避難を強いられた人びとは、ばらばらに小高を離れていった。小高を離れたあとも、当初は公共施設や家族親族の家などへ一時避難し、そこから県内や隣県の宿泊施設、市内の仮設住宅や借上げ住宅へ移り、複数の居所を転々とした世帯もあった。当時、誰がどこへ避難したのか、住民同士の連絡も十分にとれない状況であったという。5年間は非常に辛い経験であった。

このような過酷な時期を経て帰還した人びとを待っていたのは土地の荒廃であった。生活圏の除染は終了したものの動物が闊歩し雑草の覆い茂った荒れはてた土地に囲まれた自宅であった。住む人のいなくなった住宅は荒れていった。帰還した人たちは、庭の手入れをして花を植えてかつての暮らしを取り戻し、帰還後7年を経て、大富はまた美しい山里の風景へと変わっていった。

サロン活動で人びとは5年間の個人的な経験をすべて語り合ったわけではない。むしろ思い出したくないという過酷な経験は語られないままに、日常的な会話をおしゃべりとして交わすことで情緒的交感を得て、つながりを再生していった。

「戻ってきてよかった。戻った人は元気である。ここにいるとストレスがない。よそへ出た人はなにかとストレスで元気がないようにおもう」と、HIさんは語っている。

(2) 地域の歴史の再構築

第二の成果は、地域の歴史の再構築にかかわる実践とコミュニティの関係をとらえた点にある。

大富地区では、帰還の翌年、2017年春に当時の区長や有志数名で『大富の姿 平成29年春』というタイトルの動画DVDを作成した。そのナレーションでは作成の意図をつぎのように語っている。

「平成28年7月に避難指示解除準備区域が解除されました、大富に帰還された家からぼつりぼつりと明かりが灯る様になりました。一方、帰還を断念せざるをえなかった家々の取り壊しが目立つようになりました。このような光景を見た時、大富の現在のありのままの姿を後世に記録として残したいと思い、映像とコメントを通じて納めました。」

5年の空白を経て、7割以上の住民は帰還していない。帰還を断念した家々の取り壊しが始まり、大富のさらなる変貌が日々感じられる。今の姿を動画に撮って「後世に記録として残したい」という思いで、大富の家々を一軒ずつビデオに撮りながら廻りコメントしながら大富の現状をDVD作品に編集している。

2017年11月には、パート2も作成された。「前に作成した『大富の姿』から心に残った映像を選び、今回新たな映像と組み合わせて作成しました」とDVDケースに記されている。パート2では、「後世に大富の現実を映像とコメントを通じて少しでも残すことができたではないでしょうか」とも述べられている。

これらの二つのDVD作品は、記録として後世へ受け継がれていくことを意図したオーラルとビジュアルな記録である。サロンで上映して、昔の大富を想起しその変貌を共に語り合いながら認識を共有している。サロン・コミュニティのなかで、地域の変貌を記録しつつそれを地域の歴史としてオーラルな語りをとおして、共同で認識していく場はすなわち地域の歴史の再構築の場としてとらえられる。

研究期間中の以上のような調査結果をふまえて、研究代表者は、本研究課題の研究調査活動に加わった二人の研究協力者、大島岳と庄子諒とともに2023年6月の国際社会学会 RC38でのセッションを組織して成果を発表し、さらに、国内学会での研究報告や学会誌での論文発表によって成果の公開を予定している。また今後、研究成果を研究協力対象へ還元していくことを図る所存である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小林多寿子	4. 巻 21
2. 論文標題 考現学と「見る」方法 コロナ禍時代の非-参与型調査の可能性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代風俗学研究	6. 最初と最後の頁 17-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林多寿子・庄子諒	4. 巻 17
2. 論文標題 コロナ禍のフィールドワーク 福島県南相馬市における相馬野馬追調査に取り組む一橋大学社会学部小林ゼミナールの場合	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本オーラル・ヒストリー研究	6. 最初と最後の頁 9-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林多寿子	4. 巻 15
2. 論文標題 オーラルヒストリーとアーカイブ化の可能性 質的データ・アーカイブ化研究会調査より	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本オーラル・ヒストリー研究	6. 最初と最後の頁 77-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24530/jjoha.15.0_77	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 小林多寿子・庄子諒
2. 発表標題 コロナ禍のフィールドワーク 福島県南相馬市における相馬野馬追調査に取り組む一橋大学社会学部小林ゼミナールの場合
3. 学会等名 日本オーラル・ヒストリー学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Tazuko Kobayashi, Minna-Kristiina Ruokonen-Engler
2. 発表標題 Doing Biographical Research Under Conditions of Pandemic: Methodological Challenges and Methodical Innovations
3. 学会等名 The Fourth International Sociological Association Forum of Sociology (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 岩本通弥編 小林多寿子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 380
3. 書名 『方法としての<語り> 民俗学をこえて』第10章「社会学における質的データとアーカイブ化の問題 オーラリティと声の公開の可能性」(小林多寿子)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	大島 岳 (OSHIMA Gaku) (20880256)	明治大学・情報コミュニケーション学部・助教 (32682)	
研究協力者	庄子 諒 (SHOJI Ryo)	専修大学・人間科学部・兼任講師	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------